

後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン
3. 解放の神学1——フェミニスト神学1
4. 解放の神学2——フェミニスト神学2
5. 政治神学2——アガンベン
6. 政治神学3——ジジェク + 12/5
7. 研究発表 11/21
8. 研究発表 11/28
9. 研究発表 12/5
10. 解放の神学3——黒人神学 12/12
11. 解放の神学4——アジア 12/19 12/26 は休講（東京出張）
12. 宗教の神学とヒック 1/9
13. エコロジーの神学 1/16

<前回>アガンベン1

(1) シュミットの主権・例外（復習）

1. シュミット『政治的なものの概念』
2. 政治（友・敵の敵対構造）にとって主権（決定的事態における決定遂行の権限）は論理的に不可避的である。主権：「人間の物理的生命を支配する」権力であり、それは、「刑の判決の形で、人間の生死を意のままにする権限、すなわち生殺与奪の権」を含む。
3. 法秩序の内部にありながら、法秩序を超える。＝例外

(2) アガンベンの政治哲学とホモ・サケル

4. シュミットの主権論あるいは「原初的な政治的構造」（アガンベン、1995、107）。
シュミットの主権論 → 逆説と例外という論理構造
5. 「主権の逆説は次のように言い表される。『主権者は、法的秩序の外と内に同時にある』。主権者は事実、例外状況を布告し、それによって秩序の効力を宙吊りにするという権力を法的秩序によって認められている者である。だとすれば、主権者は『法的秩序の外にありながら、法的秩序に所属している。というのは、憲法が全面的に宙吊りにされうるかどうかの決定は彼に任されているからである』。『同時に』という正確を期した表現は、ありきたりのものではない。主権者は、法の効力を宙吊りにする合法的な権力をもつことによって、合法的に、法の外に身を置く。」（同、25）
6. 主権の論理構造：「法的秩序の外と内」の「同時」の逆説性。
しかし、法という意味システムを根拠付けるものは何か？
7. 暴力や欲望との連関。
「主権者とは、暴力と法権利のあいだが不分明になる点であり、暴力が法権利へ、法権利が暴力へと移行する境界線だ、ということである。」（同、50）
8. 「ホモ・サケル」（Homo Sacer）。古代ローマの文献（ポンペイウス・フェストゥス『言葉の意味について』）に登場する「聖なる人間（ホモ・サケル）」という謎めいた形象——「誰もが処罰されずに殺害することができたが、彼を儀礼によって認められる形で殺害してはならなかった」——から、政治と宗教の関係性の原初形態へ。
10. 「聖化は二重の例外化をなしている。それは人間の法からの例外化であるとともに神の法からの例外化であり、宗教的領域からの例外化であるとともに世俗的領域からの例外化でもある」（同、118）、「ホモ・サケルは、犠牲化不可能性という形で神に属し、殺害可能性という形で共同体に包含される。犠牲化不可能であるにもかかわらず殺害可能である生、それが聖なる生である。」（同、119）

11. 主権とホモ・サケル（例外における同型性）。
 「一方の極にある主権者とは、彼に対してはすべての人間が潜勢的にはホモ・サケルであるような者であり、他方の極にあるホモ・サケルは、彼に対してはすべての人間が主権者として振る舞うような者である。その意味で、主権者とホモ・サケルは、同一の構造をもち互いに相関関係にある正反対の二つの形象を提示するものである。」（同、122）
12. 「原初的な政治的構造」から、近代へ。
 「生そのものが先例のない暴力へと露出されている」（同、160）、「我々が皆、潜在的にはホモ・サケルであるからかもしれない」（同、162）。
 強制収容所、全体主義、人間モルモット、安楽死、脳死（死の政治化）などの一連の問題。
13. 「剥き出しの生の空間（つまり強制収容所）へと政治が根源的に変容し」、「政治がかつてないほど全体主義的なものとして構成されえたのは、現代にあっては政治が生政治へと全面的に変容してしまっているからにほかならない。」（同、166）
 das bloße Leben(ベンヤミン) → la nuda vita

5. 政治神学2——アガンベン2

(3) アガンベンから政治神学へ

16. 「オイコノミア」（経綸）と政治神学：統治の二重構造、近代の統治機構を源泉に遡って理解すること（「ミッシェル・フーコーによっておこなわれた統治性の系譜に関する研究の延長線上に位置している」→系譜学、ギリシア哲学から教父思想へ）。
 「本研究は、西洋において権力が、「オイコノミア(oikonomia)」という形、つまり人間たちの統治という形を引き受けるようになった、その様態と理由の様態と理由の数々を探究しよう」と提案するものである」
 ・「三位的オイコノミアという装置が、統治機械の機能と分節化——内的分節化と外的分節化——を観察するにあたっていかに特権的な実験室たりうるかを示す」（9）
 「統治機械の二重構造」「権威(auctoritas)と権力(potestas)」「オイコノミアと栄光」「権力はなぜ栄光を必要とするのか？」
 「これらの問いを神学という次元へと回復してやることによって、西洋の統治機械の最終的構造がオイコノミアと栄光のあいだの関係のうちに見分けられるようになる」（10）
 「権力の中心的な秘密」、「喝采や栄光の機能は、世論や同意といった近代的な形で、現代民主主国家の政治装置の中心に依然として位置を占めている」、「同意による統治(government by consent)」（11）
17. 政治神学 対 オイコノミア神学（ポリスとオイコス）：オイコノミアと生の秩序
 「テーゼの一つ」：「広い意味での政治的パラダイムが二つ、キリスト教神学に由来している」
 「互いに相反するが、機能上は互いに結びついている」、「一つは政治神学である。これは、単一の神において主権的権力の超越性を基礎づける。もう一つはオイコノミア神学である。これは、主権的権力の超越性の代わりにオイコノミアは神の生の秩序であれ、人間の生の秩序であれ、内在的秩序——狭義の政治的秩序ではなく家の秩序——として構想される。政治神学のほうからは政治哲学と近代の主権理論とが生じてくる。オイコノミア神学からは近代の生政治が生じてくる。その生政治は、今日における社会生活のあらゆる面において、オイコノミア[経済]と統治の勝利を見るにまで至っている。」（13）
 ・「政治神学的パラダイム」「カール・シュミット」「近代国家理論の重要な概念はすべて、神学的概念が世俗化されたものである」、「オイコノミア[経済]は世俗化された神学的パラダイムであるかもしれないとするテーゼは、当の神学自体へさかのぼって作用する」（16）、「神の生と人間の歴史とがはじめから神学によって一つのパラダイムとして構想されていること、つまり神学はそれ自体からして「オイコノミア的」だということ、神学は

単に世俗化を通じて後から「オイコノミア的」になるというのではないということ」（16-17）、「歴史とは結局、政治的問題ではなく「経営」や「統治」の問題だということ」、「キリスト教信者が求める永延の生はつまるところ「国(polis)」というパラダイムのものではなく「家(oikos)」というパラダイムのもとにある」（17）

18. 近代化・世俗化をめぐる：オイコノミアと統治→社会：経済と政治

「ヴェーバーにとって世俗化とは、近代世界のいや増す幻滅と脱神学化の過程の示す一面である。それに対してシュミットにおいては反対に、世俗化は神学が現前しつづけているということ、神学が近代においてまさしく働きつづけているということを示すものである」、「神学的諸概念と政治的諸概念」「ある特有の戦略的關係」、「その關係は政治的諸概念をその神学的起源へと差し向けつつしるしづけるものである」（18）

「世俗化の問題をめぐる論争」、「ハンス・ブルーメンベルク、カール・レーヴィット」（20）

19. ペーターズンとシュミット：「カテコーン」とは？（43頁も）

「世俗化に関する論争から生まれた」「秘められた問題」「カテコーンの」と定義できる神学的概念」（24）

「「終末(eschaton)」を遅らせ引き止めているもの、つまり王国の到来と世界の終わりを遅らせ引き止めているものが何かあると断言」、「シュミットにとっては、そのように遅らせている要素とは帝国である。ペーターズンにとっては、それはキリストを信じることに對するユダヤ人の拒否である」、「人類の現在の歴史は、王国が遅れているということにもとづく「合い間(interim)」なのである」、「前者にとっては、この遅れはキリスト教帝国の主権的権力と一致している」、「後者にとっては、キリスト教へのユダヤ人の回心がうまくいかなかったことによる王国の宙吊り、教会が歴史的に実在することを基礎づける。」（25）

「教会が存在しうるのは」「「具体的終末論が取り除かれ、その代わりに「最後の物事に関する教説」が置かれているからにはほかならない」、「本当に問題になっているのは、政治神学を受け容れることができるか否かということではない。ここで本当に問題になっているのは、「具体的終末論」を遅らせ除去する、この「カテコーン」という権力の本性と身元である」、「「終末」「を宙吊りにする権力をもつ出来事」「歴史において神の臨在が起こらないように大審問官が見張っている。」（26）

「ペーターズンを代表者とするこのカトリック的反ユダヤ主義の特性」「教会の実在はシナゴグの持続を基礎とする」（27）

20. アリストテレスと単一支配（モナルキア）→ 政治神学のギリシア哲学的文脈

「アリストテレスの『形而上学』第十二巻」「「主権者が多くいるのは良くない。主権者は一人であるべきである」、「単一支配(monarchia)」、「ユダヤ教およびキリスト教という領域において、単一支配的権力に対する政治神学的な正当化がなされたが、このアリストテレスによる不動の動者という神学的パラダイムはいわばその正当化の原型になっているというのである」（28-29）、「偽アリストテレスの『宇宙論』」「古典的政治学から神の単一支配というユダヤ的構想への架橋となっている」、「神はあらゆる運動の超越的原理であり、その原理はちょうど軍司令官が自分の軍隊を導くのと同時に世界を導くものとされる」、「「神とは「権力」が」「宇宙において働くにあたっての前提条件のことである」（29）

21. 単一支配と三位一体、政治と宗教との本質的連関

「ペーターズンは」「アレイオス派に関する論争に関して、神の単一支配という政治神学的パラダイムがどのように三位性神学の展開と衝突するかを論証しようとする」、「「神の単一支配に関する教義は三位性教義を前にして挫折せざるをえなかった。アウグストゥスの平和(pax augusta)の解釈はキリスト教終末論を前にして挫折せざるをえなかった」（32）、「「政治神学」のようなものはもはや、ユダヤ教や異教という土地においてしか存在することはできない」、「「政治神学」は神学的に言って不可能だということを論証しようとした」（33）

「シュミット」「ペーターゾンによって分析されたこの同じ一節を用いて、いわば反対の帰結を引き出している」、「皇帝の隠喩とは、統治者や代務者を通じて自らの単一の権力を行使するという隠喩」(35)、「カッパドキア派の神学が専心していたのは、アレイオス派や同一実体派の最後の抵抗を精算すること、そして単一の実体が三つのはっきりした位格になるとする教説を作りあげること」(36)

6. 政治神学3 —— ジジエク 1

スラヴォイ・ジジエク『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』

<現代の状況と問題設定>

0. 誰のためでもなく、何のためでもなく

・「ポストモダン時代とその「思想」とやらにみられるもっとも悲惨な状況のひとつは、宗教的な要素が様々な衣をまとって回帰していることである」

「原理主義」「〈ニューエイジ〉的精神主義から脱構築主義そのもの」(7)

(宗教回帰は、1960年代の世俗化論の予言がはずれたという点で、宗教学ではしばしば話題になるが、世俗主義変容としてのスピリチュアリティこそ、真性の宗教が戦うべき相手なのかもしれない。では、どうすのか。)

↓

・ラカン派マルクス主義者ジジエクの提案。

「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」、「聖パウロ」(8)、「聖パウロを離れてキリストは存在しない」(9)

(20世紀前半の宗教社会主義論の再評価・再生は可能か？)

イエスではなく、パウロ、これがポイントである。現代のパウロ政治神学への注目は、重要な研究テーマである。)

1. バルカンの亡霊を放棄する

・「ある種の多文化主義的夢想が悪夢に転じたもの」(11)

・「反転した人種差別」「置換された人種差別の論理」(13)

・「今日の「反省された」人種差別は、逆説的に他者の文化に対する直接的な尊敬を通じて現れうるものである」(15)

・「グローバル的反省化／媒体化はそれ自体の野蛮な直接性を生むというヘーゲルの教え」(17)

・「この直接性が表しているのは、グローバルな反省化に伴った〈他者性〉に対する純粋かつ赤裸々な(「昇華されざる」)嫌悪感にほかならない」(18)

・「ソーシャルワーカーや社会学者や社会心理学者のように語りはじめる」「実践とそれに内在するイデオロギー的正統化との一致はむきだしの暴力とそれをめぐる無力で無能な解釈へと崩壊する」(19)

・「労働者の搾取という階級問題は、「〈他者〉に対する不寛容」という多文化主義的問題に変容する」

・「自由-民主主義的資本主義のグローバルな秩序こそが最終的に見出される「自然な」社会体制であると、いまなお信じている」(20)

(以上が、戦うべき敵の動向についての一つの説明である。しかし、「反省的」(reflexive)という訳語はわかりにくい。)

2. 資本の幽霊

・「われわれの前提はこうである。マルクスの用いた、いわば現実社会の疎外状況を測るための暗黙の物差しである神学的な共産主義概念(生産力の完全な解放を実現した社会)をわれわれが捨てたとしても、マルクスの「政治経済批判」の大部分、つまり資本主義的

（再）生産の自己推進的な悪循環に関する彼の明察は、生き残るのである、と。」（32）
（基本的なジジェクのスタンスに関わること。記憶すべきこと。）

3. 〈対象 a〉としてのコーク 4. 悲劇から嘲笑喜劇へ 5. 犠牲者たち、どこもかしこも 6. 空想的〈現実界〉 7. なぜ真理は怪物的なのか 8. 石とトカゲと人間について 9. 構造とその出来事 10. 十戒から人権へ

1 1. 寛容の原理

- ・「例外が[普遍的な]規則に基礎を与える」（164）
- ・「真に弁証法的な問題は、連鎖と例外が直接的に一致することである」、「例外的な形象の連鎖」（165）

（シュミット、アガンベン、ジジェク……。啓蒙的近代の「普遍—特殊」とは、別の概念構築の試み。その意味では、ポストモダン。キリスト教の普遍性とは？）

1 2. キリストによる束縛の解除

- ・「キリストが（彼に先行するブッダのように）」「社会階層の停止を強調するため」、「この新しいコミュニティは明らかに除け者たちの集団として、既存の「有機的な」グループとは正反対のものとして構成されている」、「異常な」除け者コミュニティ」「の系譜」（175）

- ・「集団形成の二つの例」「〈教会〉と〈軍隊〉」、「根本的なパラドクスは、経験的な制度に関していえば、二つのコミュニティはしばしば入れ替えられる、ということである」（176）

- ・「〈教会〉と、社会制度内の〈教会〉の権威を脅かす対抗-コミュニティとして台頭した修道院」、「〈教会〉のあったところに、〈軍隊〉が生じなければならない」（177）

- ・「均衡状態を回復するための円環の論理を停止すること」「社会のヒエラルキーは逆立ちしている」、「精神分析でいう倒錯への誘惑を避けること」「そんなことになれば」「単にその上下を入れ替えて逆立ちさせただけであり」「いぜんとしてそれに寄生することになる」、「愛は社会のヒエラルキーの偉大なる粉碎者ではないのか」（178）

（単なる逆立ちという解放運動の問題点。解放の神学、特にフェミニズムの落とし穴）

- ・「愛において、そして愛という動機から、愛する者を憎め」、「私は、かけがえのない人間として彼を愛するがゆえに、社会的-象徴的構造に取り込まれた彼の側面を「憎悪」するのである」（179）、「社会的役割」やイデオロギー的な機能や仮面の下に隠れている「現実の人間」をみるべきである、というありふれた「ヒューマニズム的な」思想とはいっさい関係ない「聖パウロは、断固たる「理論的反-ヒューマニズム」の持ち主である」、「「だれをも人間的な見方によって知ることはすまい」（180）

（ここは肝心ではあるが、難しい。）

- ・「束縛の解除」は「象徴的な死」をともなっている」「法に対して死ぬ」（180）、「新たにゼロから出発する身振り」「束縛の解除」のなかには、おそろしい暴力が存在している」「徹底的な「過去の清算」という暴力」

（これはユダヤ教の起源にあるあの暴力とは違うのか。この暴力はトラウマにならないのか。）

- ・「真に信じる者は仮象を、ひとつの仮象を通じて輝き出す神秘的な次元を、信ずる」、「彼は他者のなかに、他者本人すら気づいていない〈善良さ〉を見出す。ここでは、仮象は現実にはもはや対立していない」（181）

- ・「〈絶対的なもの〉は脆弱ではかないものである」、「そうした奇跡的な、しかし同時にきわめて脆弱な瞬間において、われわれの現実にはまったく別種の次元が生ずるのである」（182）

（たしかに、絶対とは？）

・「理想化と崇高化との差異」「誤った崇拜は理想化をうむ。それは他者の弱さを見えなくする」、「あるいは」「自己のいなく幻想を投影するスクリーンとして他者を利用し、他者そのものを見えなくする。一方、真の愛は、愛する者をありのままに受け入れる」、「愛とは活動のことである」(182)

(波多野とジジェクの近さ)

13. 「おまえはやらねばならない、できるのだから！」 14. 知識から真理へ・・・
そして再び知識へ 15. 脱出

<参考文献>

1. Jon Simons (ed.), *From Agamben to Žižek. Contemporary Critical Theorists*, Edinburgh University Press, 2010.
2. Slavoj Žižek, *The Fragile Absolute --- or, why is the christian legacy worth fighting for?*, Verso, 2000. (スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対——キリスト教の遺産と資本主義の超克』中山徹訳、青土社、2001年。)
3. Adam Kotsko, *ŽIŽEK and Theology*, T & T Clark, 2008.
4. 芦名定道「現代思想と〈神〉の問い——ティリッヒからジジェクまで」、『理想』2012. No. 688、40-52頁。